

2022.11.16(水)
東京ビッグサイト会議棟

第30回職業リハビリテーション研究・実践発表会 パネルディスカッションⅡ

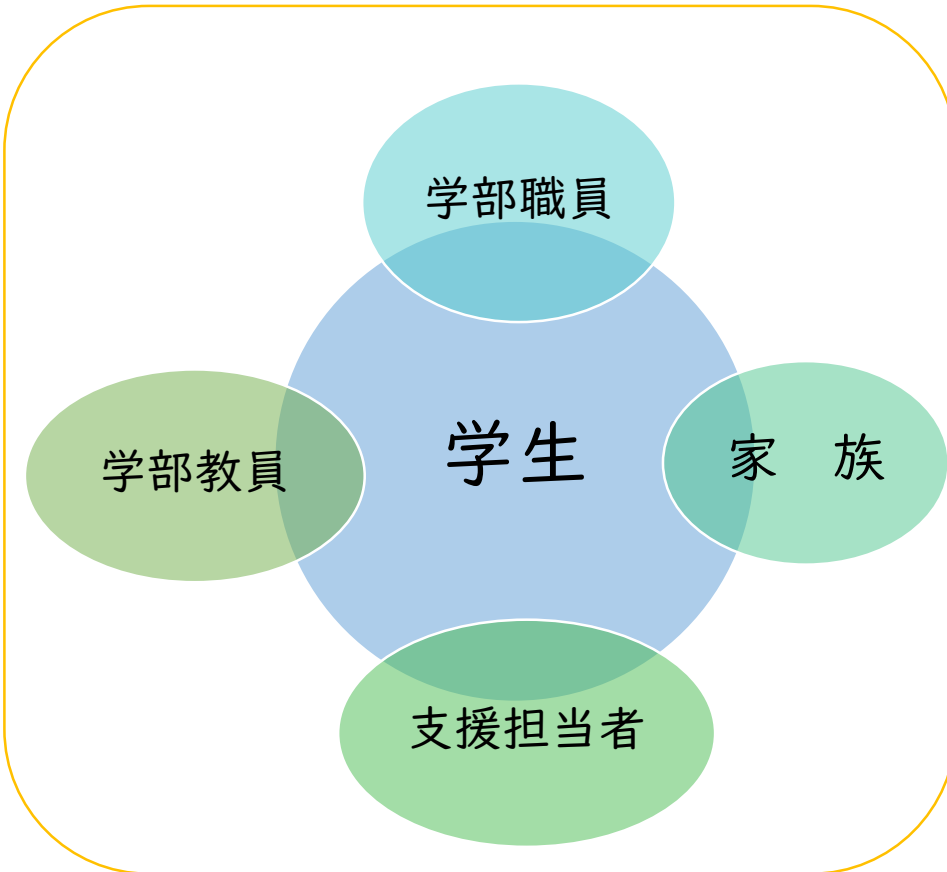
大学等における 発達障害学生への連携支援について

富山大学保健管理センター 客員准教授

西村優紀美

富山大学：障害学生支援担当者の役割

プロジェクト型チーム支援の形成



- 個別性の高い発達障害のある学生への支援を効率的に行うための支援体制づくり
- 学内の様々な関係者と部署や職種を越えて連携し、支援を実質的に進めていく

※ それぞれの立場の個人としての「知識」が、組織としての知識「組織知」となり、個々人に蓄えられ、それがそれぞれの立場で有効に活用されることが重要である。

富山大学：障害学生支援担当者の役割

支援内容	支援の種類
1. 修学支援	<ul style="list-style-type: none">① 個別面談（週一回）② コミュニケーション支援③ 家族支援④ 支援会議（教職員、学生、支援者）
2. 就職支援	<ul style="list-style-type: none">① 就職活動支援② 職業体験（インターンシップ）
3. 卒後支援	<ul style="list-style-type: none">① 卒後就職活動支援② フォローアップ支援

1. 修学支援

教育の機会の保障

- 障害のある学生が他の学生と同等の学びができるよう環境を調整し、学ぶ機会を保障する。

① 対話の場

個別面談で行うこと

1. 支援の目的・方法に関する合意
2. ナラティブ・アプローチを中心とした対話
3. 支援ニーズの把握
 - 修学上の困りごとの確認
 - 障害特性との関連を話し合う
4. 実際的な支援
 - ライフ・スキル（生活、体調、睡眠）
 - 自己管理スキル（スケジュール管理等）
 - スタディ・スキル
 - レポートの書き方や、課題に対するアプローチ方法を検討する
5. 合理的配慮に関する話し合い
 - 教職員との対話、配慮内容の検討

面談の目的

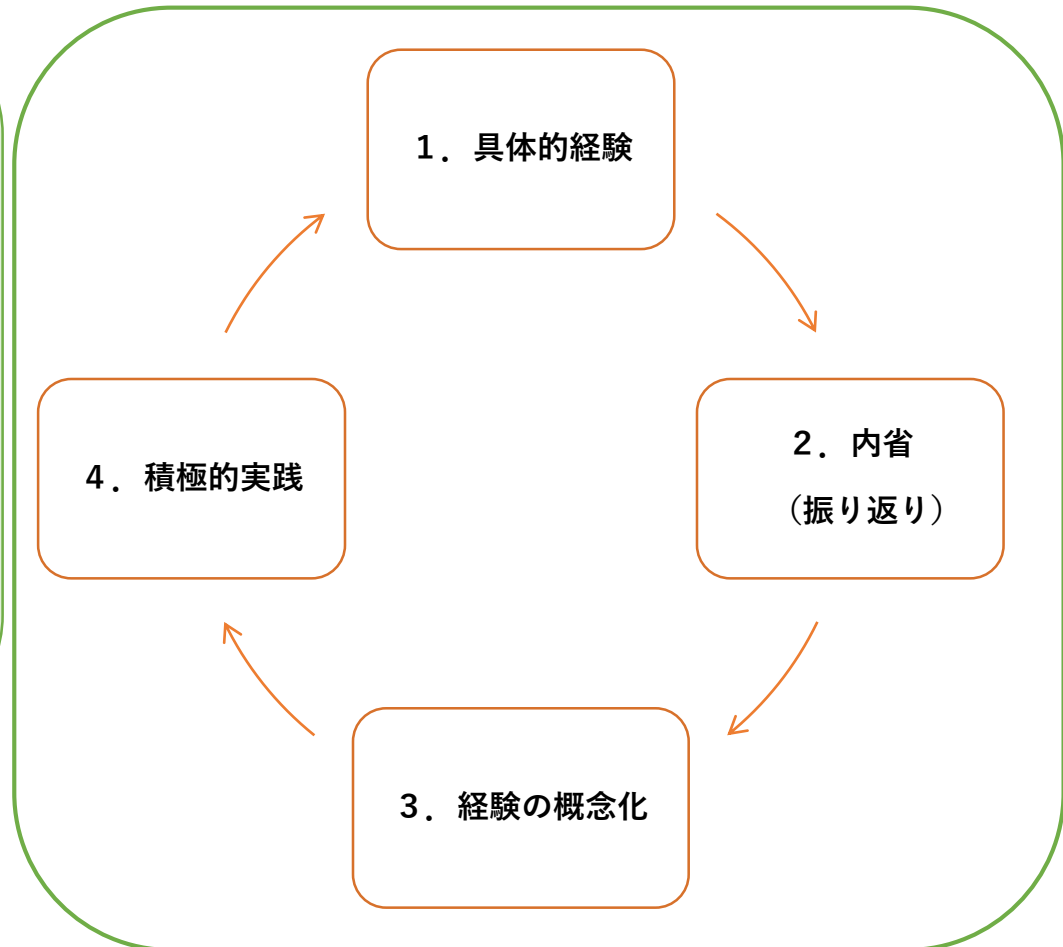
- 支援目的の共有と意思確認
 - 語り手と聞き手が語りを通して相互に影響しあい、ストーリーが変わっていくことで、学生自身が考え方や課題を見つけていく
 - 検査結果・診断、医療機関の利用
 - 特性（できること・苦手なこと）の理解
 - 障害特性への対処法を模索
 - 安定した大学生活の実現
 - 自己管理能力の向上
 - こだわりへの執着の減少
 - 生活のしやすさを体験
 - できる自分を発見
- 学生が自らの判断で対処法を選択できるようになる
- より適切な支援依頼の方法を知る
- セルフアドボカシースキルの獲得

② 経験的学習の場

※障害特性がある ≠ 発達しない

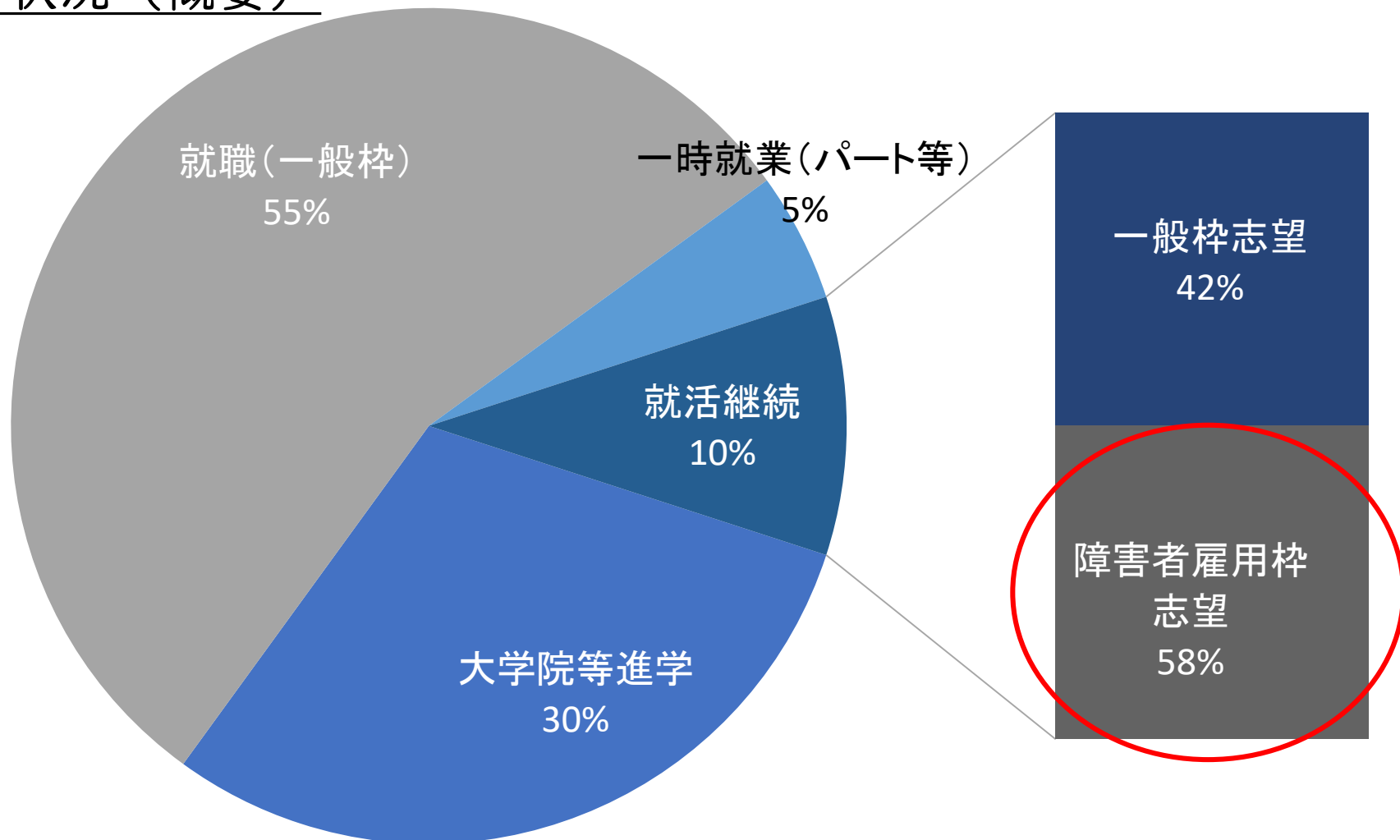
※他者との交流によって自らの経験を意味づける作業を通じて、明らかに変化していく。

※支援者の多くは、「成長し発達する」という実感を持っている。



X年に卒業した支援学生の進路状況

進路状況（概要）



※新卒採用は、ほとんどが一般枠

事例の紹介：学生 A さん



- 定期的な面談により、自分自身の特性を自覚し、積極的に配慮について検討していった。

■ 高校までの情報

➤ 「身振りや筆談でのコミュニケーション」を求めた。

■ 大学での支援

【合理的配慮】

➤ 学科および科目担当教員に配慮依頼

- ① 対話形式の授業の一部を個別課題に代替
- ② 発表が求められる課題は、文書での発表を認める

【個別面談】

➤ 本人が工夫できる点を検討

- ① 履修科目を分析
 - 出席重視、レポート課題なし科目を中心に履修
- ② 発表や質問に関して
 - 伝える内容を作成，伝え方を選択



1年前期の振り返り

【個別面談】



苦手さを事前に
知ってもらうこと
は必要だった

発表や質問は、事前に原稿
を作り、読み上げることで
伝えることができた

発話までに時間がかかるが、筆記で
の表現との差はなく、どちらも短
文。

言葉での表現に関する問題へのアセスメント

1年後期の振り返り

【個別面談】



課題は、内容を整理すれば自分で書けるから配慮は必要ない

発表原稿を作成することで、プレゼンができるようになった

すべての授業で配慮が必要というわけではない。

【家族との面談】

- 修学状況
- アルバイト

2年前期



【合理的配慮】

自分からわからないところを伝えることができる。

⇒ 配慮依頼なし

【個別面談】

① 授業の検討

→ 実験レポートはマニュアルがあり、一人で書くことができた

② アルバイト

→ 想定される困り事を話し合う

→ 「報連相」定型文を事前に作成し、メモとして持参

2年前期の振り返り

【個別面談】



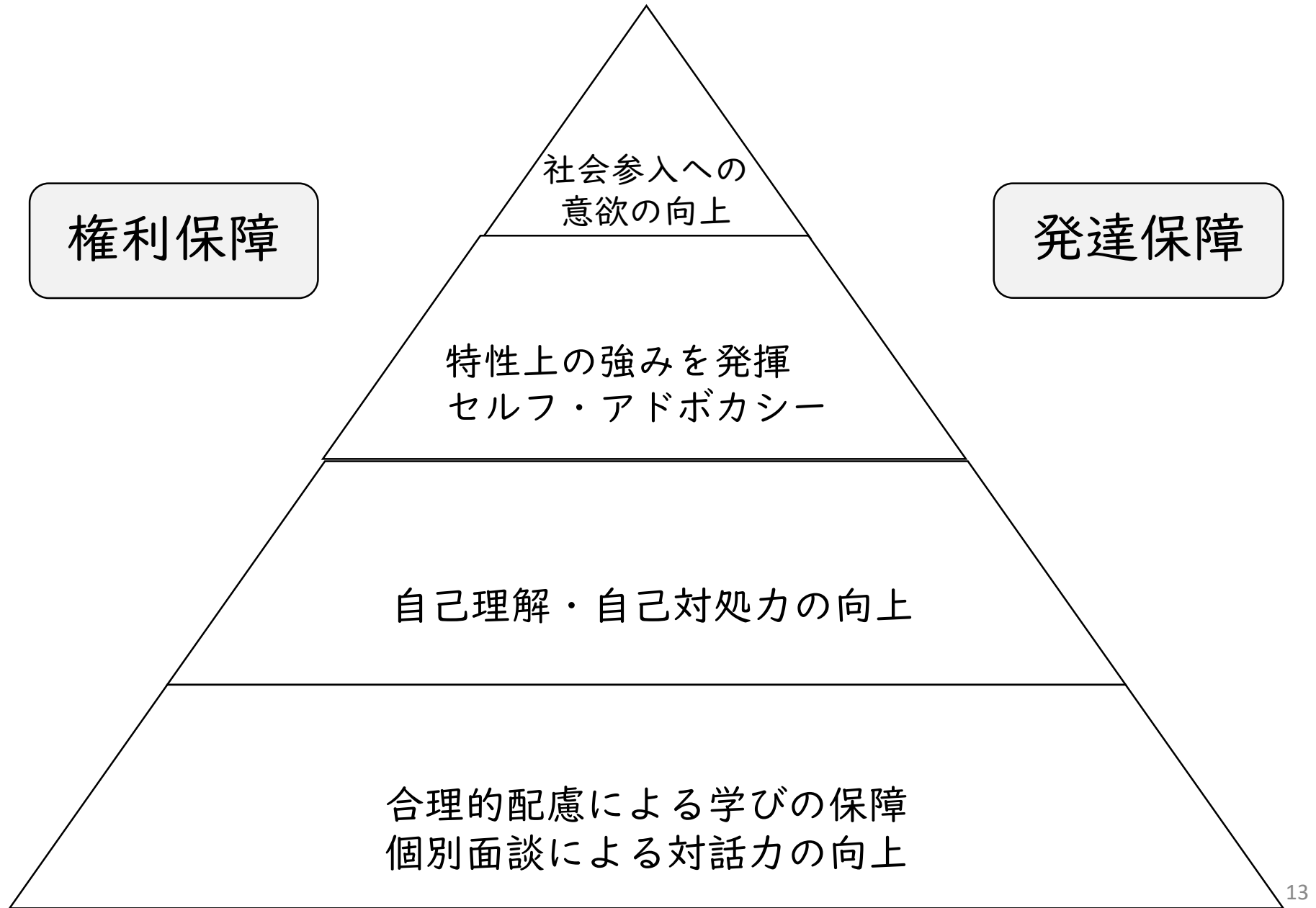
実験やレポート作成は明確な指示があるので、配慮がなくても大丈夫だった。

アルバイトの報連相は、事前に苦手さを伝えてもらえば、定型文で対応できた。
苦手さを自分から伝える必要がある。
自分のことをわかってくれたほうが働きやすい。

就労に向けて

- 障害特性を知りたいとの希望で受診
- 障害者雇用枠での就職を希望
- 大学4年後期から、就労移行支援事業所リエゾンで訓練体験
- 卒業後、正式に訓練を開始し、就職活動を行う
- 卒後1年で、障害者雇用枠（事務職）で採用され、一般の職員と机を並べて仕事を行う

高等教育機関における支援の意義



2. 就職活動支援

職業観の涵養

- 学内の就職支援担当部署との間の連携
- 在籍時から相談できる地域の関係機関との連携

就職活動の支援

① 大学での就職活動支援

- 就職活動全体の流れをナビゲート
- 就職・キャリア支援センター主催研修への選択的参加
- 職種選択、企業分析、自己分析、採用書類作成
- 面接事前練習・事後振り返り
 - 模擬面接
 - 直面した問題を振り返り、自己分析に繋げる定期面談

② 就労移行支援事業所でのインターンシップ

- 就労移行支援事業所の見学，訓練体験・職業評価
- 継続的な訓練体験
- ロールモデルとの出会い

③ 大学と就労支援機関・企業との連携

移行支援

- ※ 大学で把握している支援スタイルや対話のコツ（本人に合った伝え方）を就労支援機関，企業に引き継いでいく
- ※ 就職後も定期的に支援会議の「場」で情報共有しながら、支援者間で対話を重ねていくことで、適切な支援を展開することができる

就労支援機関

（ハローワーク・就労移行支援事業所等）

- ・ 本人に合った求人開拓
- ・ 採用試験の配慮調整（面接時の配慮等）
- ・ 就職前後のケース会議の調整

企業

- ・ 人的環境調整（担当窓口の決定）
- ・ 物理的環境調整（座席の配置等）
- ・ 合理的配慮に関する情報の引継ぎ

大学支援室

- ・ 発達障害の基礎知識まとめ（資料作成）
- ・ 本人の障害特性のまとめ（シート作成）
- ・ 本人へのフォローアップ面談

発達障害の特性がある人への支援について

① 発達障害の特性がある人に対する支援：

– 教育機関における支援者の役割は、学ぶ機会の保障

– 支援における対話の意義

① 合理的配慮の内容は環境により変化する

② 疑問や困り事は日常の中で生まれる

③ 対話を通して学生は自分自身の特性に気づく

– 基本的な支援の流れは大切。しかし、障害名のみ依存した対応のマニュアル化は、本人の感覚とずれていく可能性がある

② 重なり合う支援：

– 在学時から働き方の選択肢を提案，体験の場を提供

– 支援の連続性を実現するための移行支援

③ 大学が就労支援機関に求めること：

– 障害学生支援の現状は、大学によってさまざま

– 大学での支援状況をアセスメント